

華北新石器時代の墓制上にみられる集団構造(二) : 山東新石器時代の階層表現と礼制の起源

宮本, 一夫
九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門 : 教授 : 東アジア考古学

<https://doi.org/10.15017/7969>

出版情報 : 史淵. 143, pp.105-145, 2006-03-01. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン :
権利関係 :

華北新石器時代の墓制上にみられる集團構造（二）

——山東新石器時代の階層表現と礼制の起源——

宮 本 一 夫

一 はじめに

先史社会に見られる階層化あるいは社会の複雑化の過程に関して、中原地域については詳述したことがある（宮本一九九九b）。特に新石器時代の前期から中期にかけての墓葬分析により、社会の階層化の過程を描いたところである（宮本一九九五）。また、こうした過程が同様に黄河下流域すなわち山東地域にも存在し、血縁家族単位を母胎として社会が階層化していく過程を概説的に述べたことがある（宮本二〇〇五）。ここでは新石器時代中期後半に血縁家族を単位とした階層化が始まり、新石器時代後期には父系家族による階層上位者の固定化を示す首長制社会に移行している。さらに新石器時代後期後半の山東龍山文化では首長墓地が出現するより複雑な首長制社会に移っていったことを述べた。その際、墓地分析や墓葬構造の変化を示すことによって、社会の階層化を明らかにしたつもりである。しかし、概説書ということもあり、実際の細かな分析結果やその証明方法を提示することができなかつた。ここではそれらを提示することにより、山東地域における上記した社会の複雑化の過程を実証的に示したい。

ところで今回対象とする時代は、華北先史社会においても、新石器時代中期の大汶口文化期と新石器時代後期の山東龍山文化期である。この時期の社会の複雑化とりわけ階層化の過程は、墓葬分析においてこれまで活発に議論されてきた。その中でも、実証的な墓葬分析を進めてきた渡辺芳郎氏による一連の研究(渡辺一九九二・一九九五)は、非階層化要素と階層化要素に分けながら、実体的な階層化様相の分析を進めており、実証性という意味ではそれまでの中国人研究者にはない細かな研究であり、評価に値するものである。また、この時期の社会の階層化や複雑化あるいは分業化という面を、集落構造の分析や墓制から示したものに、欒豊実氏の体系的な仕事がある(欒豊実一九九七)。また、同じく墓葬分析とともに競争的饗宴による社会の組織化という視点や、卵殻黒陶などの酒器とその製作における専門化などから、社会の複雑化を示したアンダーヒル氏の著作が存在する(Underhill 2002)。前者の欒豊実氏の研究は土器の編年的研究に始まり、墓制や集落分析から社会を復元したものであり、考古学的な基礎的研究を駆使したものである。本稿でも基本的には、欒豊実氏の編年観を基礎に分析を進めたい。また、後者のアンダーヒル氏のもは、欧米の考古学的関心から対象時期の分析を進めたもので、これまでの中国考古学にはない斬新な分析と解釈が行われており、参考にするべき点も多い。特に、欧米の考古学理論の実践や実証的な研究過程を重んじている点は、評価できるものである。

本稿ではこれらの体系的な研究を参考にしながら墓制の研究を進めるが、一連の墓制研究は、後に述べる渡辺芳郎氏の研究(渡辺一九八七・一九八九・一九九二・一九九四・一九九五)を以て、その分析法においてはほぼ出尽くしている感がある。一方、私自身の葬送分析に関する分析法に関しては、歴史時代を対象としたものではないが、既に示したことがある(宮本一九九九a)。墓葬の空間配置の分析と副葬品などの分析から社会の階層構造を明らかにすることができるとするものである。特に、青銅彝器などの副葬品の組み合わせが階層構造と対応していることを明らかにした。渡辺氏も述べるように、大汶口文化から山東龍山文化に至る過程は、墓葬規模と

副葬品数はほぼ対応する関係にある(渡辺一九九五)。また、副葬品に示される階層化要素の中にも、大汶口文化では工具系階層性と土器系階層性に区分されることを渡辺氏は述べている(渡辺一九九二)。さらに渡辺氏によれば、大汶口文化後期から山東龍山文化にかけて、階層化要素が土器系階層性に収斂していく現象を提示している(渡辺一九九五)。しかしながら土器系階層性へ収斂していく過程がなぜ生じたかに対する明確な説明はない。渡辺氏は、墓地資料における階層の変異は葬送儀礼を通じて表現される儀礼的表現型であることを述べている(渡辺一九九五)が、その具体的な現象や意義に関しては言及がない。ここに本稿の問題意識が存在するのである。私自身は、この問題を解決するためには、これまでの研究とは異となった視点と分析方法の違いを以て対処する必要性を感じるのである。では、その具体的な分析方法とは、既に歴史時代の葬送分析で示したような副葬品の器種、ここではとりわけ副葬土器の器種構成を問題にすべきであると考えている。嘗て渡辺氏が呈子遺跡の龍山文化期墓地の分析を行った際(渡辺一九八七)、副葬土器構成の規範とその序列性に気がつきながらも、それ以上の分析や解釈を行っていない。私自身、個々の墓地の副葬土器構成をみてみると、そこには被葬者の社会的階層構造とそれに関連する規範が存在しているように見えるのである。仮にこうした規範が存在するとすれば、それは葬送儀礼を通じた儀礼による社会階層の表現であり、葬送行為の規範が社会秩序と対応していることを示している。さらには、儀礼表現を以て示す社会秩序とは周代の礼制に系譜的に繋がる概念であると考えられる。礼制の起源を探る意味でも、儀礼にみられる規範と社会階層との関係を注目すべきであろう。

二 分析方法

まず墓葬分析において社会の階層化を示す指標として、副葬品の内容やその量の多寡が墓壇の大きさと相関し

ながら格差が認められるかにある。墓壙の大きさは労働の投下量の違いであり、その違いは生前の被葬者の社会的な地位やその被葬者の家族集団の社会的な地位と関係している可能性がある。さらに被葬者に供えられる副葬品は、まさに被葬者に対する葬送者の社会的な価値観を表しているであろう。こうした観点を基にした分析によつて、これまで西周期や夏家店下層期の墓葬分析に一定の成果を上げてきた(宮本二〇〇〇)。ここではまず山東新石器社会の階層化の過程を、既に行つた分析と同じ方法で明らかにすることにする。それは、墓葬規模と副葬品との相関関係を探るものであり、さらには墓葬構造との相関関係を目指すものである。加えて墓葬の空間構造からの分析と解釈を行うものである。

既に述べたように、大汶口文化から山東龍山文化にかけて次第に土器によつて階層化要素が明瞭に示されるようになることを渡辺氏が指摘している。それはおおよそ大汶口文化後期以降であるが、この現象を追認するため、大汶口墓地において墓壙規模と副葬土器数との相関関係の有無をまず検討する。さらに本稿で注目すべきは、副葬品の内容である。特に副葬された土器の器種組成が階層化現象と相関しているかに注目したい。これは後の殷周社会において青銅彝器の組み合わせが階層構造を示す指標となつていること(宮本一九九九a)と、何らかのつながりがあるのではないかという予見から進めるものである。周代用鼎制度(愈偉趙一九八五)に示されるような儀礼化した青銅彝器の種類や量が身分秩序と対応しているという歴史認識には、厳密な青銅彝器の器種個数と階層秩序が対応する規定が西周前期には確立していないという一定の批判(林滙一九九〇、岡村二〇〇五)がある。特に鼎の数と身分標識が厳密には一致していないという批判であつた。しかし、戦国時代の儒家が目指した厳密な儀礼標識ではないにせよ、青銅彝器の器種と身分秩序には一定の関係性があることは、西周前期の燕の墓制分析で示したように(宮本一九九九a)、肯首できるものである。こうした現象が、青銅彝器ではないが副葬土器において遡つて新石器時代に存在するか大いに興味を持たれるところである。

さらに山東地域は大汶口文化に認められるように、他地域に先駆けて觚形杯や杯あるいは鬻などの酒に関係する酒器が発達する地域である。また、これらの器が実際酒に関わったものであることは近年科学的に実証されつつある(麦戈文ほか二〇〇五)。酒を扱う酒器は祭祀行為に伴うハレの器である。いわゆる精製器種に相当し、日常容器とは異なった扱いが為されていた可能性が高い。祭祀と関係した器種が階層構造と関係しているかどうかに興味もたれるところである。さらに祭祀行為と関係するということは、儀礼行為とも関係する可能性がある。後の周社会では礼制という形で身分秩序が整えられるが、儀礼行為と階層秩序が相関しているならば、その現象は礼制の起源にも繋がる現象と考えることができるであろう。

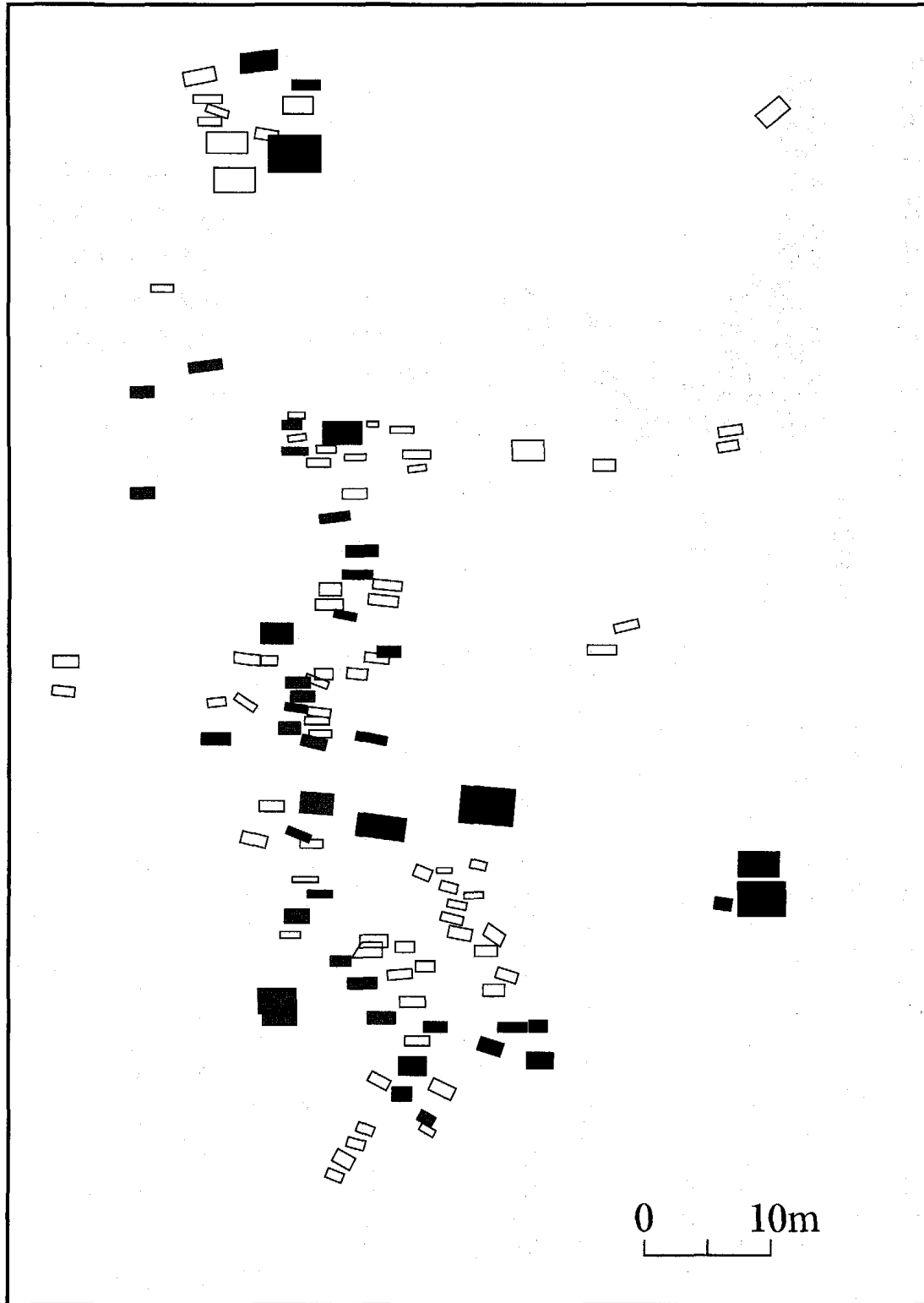
このような意図の基に、大汶口文化期では大汶口中・後期の大汶口墓地を対象とし分析を行い、そこから読みとれる階層構造をモデル化する。続く山東龍山文化期では呈子遺跡を分析対象とし階層構造のモデル化を示す。さらにこうしたモデル化が有効であるかを、大汶口文化期から山東龍山文化期において他の複数の遺跡を使って同様な分析を行い、既に提示したモデルの妥当性を検討することにした。

以上のように、山東先史時代の階層化過程と相関するであろう儀礼化の過程を、墓葬分析によって実証的に進めていくことにしたい。また、そうした儀礼化の過程が、一つ山東に限らず、他の地域とりわけ中原地域との比較においてどうであるかを考えてみたいのである。そのことこそが、後の殷周社会にみられる青銅彝器を中心とする社会秩序との関係を考える上で重要になってくる。まさしく初期国家段階である二里头文化や商文化のなりたち(宮本二〇〇五・二〇〇六)を考える意味で、礼制の起源は重要となってくるのである。

三 大汶口文化期の事例分析

大汶口文化期の事例として、大汶口文化の標識遺跡となった山東省寧陽県大汶口遺跡を取り上げることとする。大汶口遺跡は大汶河の南面に位置し、この部分が一九五九年に発掘され、大規模な墓地群であることが明らかとなった。その後、大汶河の北側部分が一九七〇年に発掘され、墓地群と一部の住居址群が発見されたが、墓地の年代は一九五九年の発掘のものより古い大汶口文化前期のものである。本来の集落の中心は大汶河の流路によって破壊され、その周辺に位置する墓地群のみが現在に残っている。ここでは社会の階層化が認められ始める大汶口文化中期以降を分析することにする。その意味で、対象とすべき墓地群は一九五九年の発掘部分である。ここでは大きく大汶口文化が前、中、後期に分期されているが、欒豊実氏らの土器編年(欒豊実一九九七)など現在の知見からすれば、大汶口墓地前期が大汶口文化中期前半、大汶口墓地中期が大汶口文化中期後半、大汶口墓地後期が大汶口文化後期にほぼ相当している。本稿でもこの年代観にしたがい、分析を進めたい。

まずこれら三期における墓葬分布の変化を眺めてみたい。図1に示すように、大汶口文化中期前半は小型の墓がグループを作りながら、等質的に分布している。中期後半になると幾つかの墓群内に大型の墓葬が出現し、墓葬に見られる階層格差が認められ始める段階である。後期になると墓群毎に大型墓と小型墓というように、墓群内の格差から墓群間で格差が認められ始める段階である。そこで時期毎の墓葬規模の格差の広がりを見つめるならば、図2のように次第に時期を追う毎に墓葬規模が大きくなるとともに、小型の大きさの墓壙と大型の大きさの墓壙の格差が広がっている。このことは、まさしく社会内での被葬者の階層格差が広がることを意味している。また、図1に示されるように、墓群内での墓葬規模の格差から、後期にはさらに墓群単位での相対的な墓葬規模



□ 中期前半 ■ 中期後半 ■ 後期

図1 大汶口墓地墓葬分布変遷図

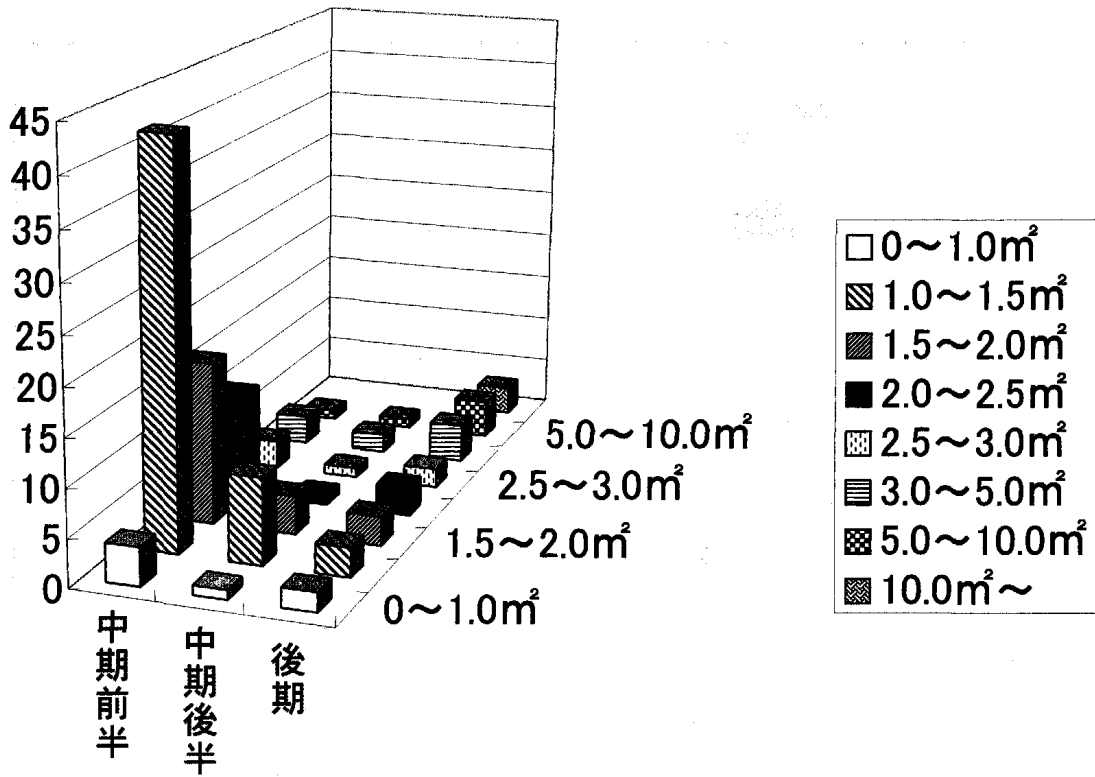


図2 大汶口墓地墓葬規模変遷図

の格差が認められるようになる。このことは血縁集団単位での階層格差が進行していったことを示していると想定できる。

実際こうした格差が、墓葬規模やその配置だけではなく、副葬品数やその構成と相対関係にあるかを次に検討してみたい。副葬品と階層関係では、既に渡辺氏の分析により、工具系階層と土器系階層というよう(渡辺一九九二)に、副葬品の属性により階層規範が異なることが述べられているが、すでに述べたように、ここでは次第に収斂されていく土器系階層に注目したい。ここで扱う大汶口墓地は大汶口文化中期から後期の墓地であり、副葬品の中でも次第に土器が階層関係と連動していく段階である。

ここで、土器と階層関係が実際に連動しているかどうかを検証するために、まず大汶口墓地全体の墓壇規模と土器数との相関関係が存在するか否かを考えたい。墓壇はすでに述べたように墓葬を構築する際の労働投下量を示しており、被葬者の生前の社会的地位と対応している可能性がある。ただし、未成人の子供を含んで考えると

年齢階梯的な要素を含むことになり、成人墓のみを対象とすべきである。そこで、分析対象としては形質人類学的な鑑定により未成人とされたものは除外することにする。したがって全墓数は一一八基となる。

図3に示すよう、全墓地の墓壙規模には、 4m^2 、 7m^2 を境に度数分布に格差がみられる。 4m^2 以下は明瞭な墓壙規模の格差はみられず、漸移的に増加している。ここでは便宜的に $1\cdot5\text{m}^2$ と 2m^2 を境として区分し、先の格差と合わせて四段階の墓壙規模の段階的な格差を認める。すなわち $1\cdot5\text{m}^2$ 未満、 $1\cdot5\text{m}^2$ 以上 $2\cdot0\text{m}^2$ 未満、 $2\cdot0\text{m}^2$ 以上 $4\cdot0\text{m}^2$ 未満、 $4\cdot0\text{m}^2$ 以上という区分である。問題は、このような墓壙規模の格差が副葬土器数の格差と対応しているかである。図4に示したように、墓壙規模 $1\cdot5\text{m}^2$ 未満の墓葬では、副葬土器数 $1\sim5$ 個の墓葬が最も多く、墓壙規模 $1\cdot5\sim2\cdot0\text{m}^2$ では同じく副葬土器数 $1\sim5$ 個にピークがあるものの、その割合は墓壙規模 $1\cdot5\text{m}^2$ 未満より少なく、副葬土器数 $6\sim10$ 個の墓葬がより多い傾向にある。相対的に副葬土器数の多い墓にシフトしている。さらに墓壙規模 $2\cdot0\sim4\cdot0\text{m}^2$ では副葬土器数 $6\sim10$ 個にピークがあり、さらに墓壙面積 $4\cdot0\text{m}^2$ 以上では副葬土器数は格段に多くなっていることが明瞭である。このように、墓壙規模と副葬土器数は相関していることができる。また、時期を追う毎に墓壙規模が大きいかつ副葬土器が多い墓葬とそうでない墓葬との格差の開きが増大すること(図1・図2)を理解できる。このような結果は、渡辺氏が別の表現法で示したように、副葬土器数は階層構造を反映していることができるであろう。

続いて大汶口中期前半、中期後半、後期において、時期ごとに階層構造の別の側面を分析することにする。別の側面とは、時期ごとに階層差に対応して、副葬土器の器種構成に何らかの規範が存在するか否かを検討したい。既に墓壙規模と副葬品数が相関し、副葬土器数が階層差を示す因数であることは実証されている。そこで、副葬土器数という階層表現に応じて、副葬土器の器種に規範が存在するか否かを示したい。

表1は、大汶口中期前半時期の墓葬を副葬土器数順に並べたものである。一部、鬻や尊の組み合わせには規範

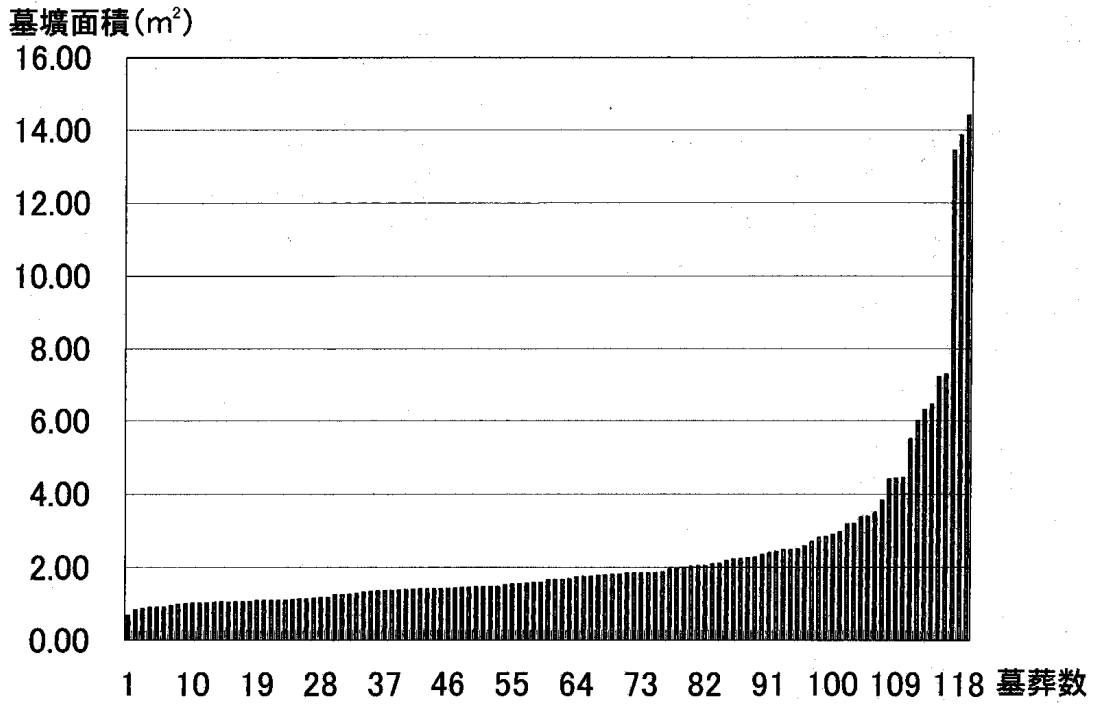


図3 大汶口墓地墓葬規模度数分布

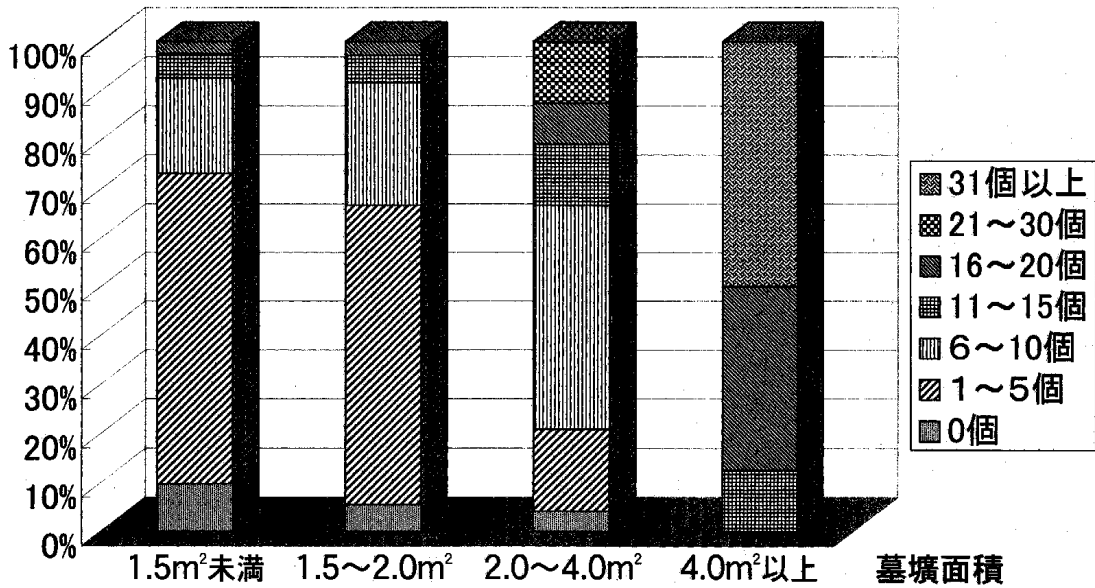


図4 大汶口墓地の墓葬規模と副葬土器数との相関

表1 大汶口墓地大汶口文化中期前半墓葬の副葬土器構成

墓番号	墓壇長	墓壇幅	墓壇面積	鼎	壺	豆	罐	杯	尊	鬲	盃	その他	土器数	備考
31	1.5	0.98	1.47										0	成年、被破壊
20	1.88	0.75	1.41	1									1	
30	2.09	0.51	1.07				1						1	
51	—	—	—	1									1	
52	2.08	0.67	1.39									1	1	
61	1.85	1	1.85	1									1	
71	2.04	0.54	1.10									1	1	
86	1.76	0.8	1.41	1									1	
88	1.77	0.47	0.83	1									1	
89	1.51	0.59	0.89				1						1	
90	1.91	0.53	1.01	1									1	
108	2.08	0.71	1.48				1						1	
14	1.28	0.7	0.90	1		1							2	
27	1.5	0.7	1.05		1		1						2	
34	1.28	0.91	1.16				2						2	
41	1.93	0.53	1.02					1				1	2	
43	—	—	—	1	1								2	
48	1.85	0.86	1.59		1							1	2	
79	2.1	0.65	1.37					1		1			2	
82	2.1	0.8	1.68	1		1							2	
84	1.19	0.57	0.68		1	1							2	
91	1.84	0.57	1.05	1					1				2	
101	2.26	0.55	1.24				1	1					2	
109	2.16	0.71	1.53	1		1							2	
114	2.3	0.55	1.27	1	1								2	子供
119	1.8	0.63	1.13		1		1						2	
120	2.22	0.65	1.44	1	1								2	
132	2.35	0.85	2.00	1		1							2	
11	2.6	1.22	3.17		2	1							3	
29	2.02	0.54	1.09	2			1						3	
55	2.36	0.6	1.42	1	1		1						3	
65	2.19	0.66	1.45	1	1	1							3	
66	2.5	0.97	2.43	1	1							1	3	
87	2.1	0.52	1.09	1	1					1			3	
73	2.36	0.7	1.65	1		1				1		1	4	
80	1.82	0.6	1.09		3	1							4	
107	2.17	0.7	1.52	1		2	1						4	棺槨
110	2.08	0.8	1.66	2		2							4	
115	2.15	0.62	1.33	1	2							1	4	
6	1.97	0.72	1.42	1	1	1	1		1				5	
23	1.96	0.52	1.02	1	2	1							5	
28	2.26	0.99	2.24	2	2	1							5	
56	2.45	0.73	1.79	2		1			1			1	5	
76	2.1	0.7	1.47	3		2							5	
112	2.18	0.63	1.37	3		1						1	5	
116	2.45	0.91	2.23	1	1	2	1						5	
45	2.03	0.67	1.36	2	3							1	6	
81	2.05	0.57	1.17	1	1	1				1		1	6	棺槨
103	3.3	0.56	1.85	2		1	3						6	
106	2.5	0.91	2.28	1		2	2					2	6	
131	2.3	0.8	1.84	1	2	1	2						6	
8	2.67	1.05	2.80	1	3	1	1					2	7	
18	2.69	0.84	2.26	4	1	1	1						7	
19	2.08	0.75	1.56	3	1	2	1						7	
33	2.25	0.91	2.05	2	1		2					2	7	
53	2.27	0.8	1.82	2	1	1	2					1	7	棺槨
94	1.75	0.75	1.31	1	3	1	1	1					7	棺槨
99	2.57	1.05	2.70	1	2	2	2						7	
12	2.92	1.09	3.18	2	2	1	1			1		1	8	
38	2.18	1.1	2.40	1		1	3					3	8	
32	2.11	0.92	1.94	6		1	2						9	
130	1.65	0.77	1.27	1	3	1	2	1	1				9	
26	2.65	0.82	2.17	1	1	1	1	1	3			1	10	
58	2.2	0.9	1.98	3	3	1	1					1	10	
63	2.53	0.66	1.67	1	3	2			1	1			10	
111	2.37	0.99	2.35	2	4	1		1	1			1	10	
7	2.37	0.74	1.75	2	3	1	2						11	
129	2.49	0.74	1.84	4		3	3			1	1		12	
102	2.4	0.57	1.37	3	2	3	2	1		1	1		13	
78	2.6	1.47	3.82	4	5	1	2	1				1	14	
59	2.92	0.97	2.83	3	3	2	1	2	2	1			18	
13	3.4	1.9	6.46	4	2	4	2		1	1	1		4	男女合葬墓、棺槨
54	2.55	0.97	2.47	5	3	9	0	5	1	1		6	30	

華北新石器時代の墓制上にみられる集団構造 (二)

性が薄い、基本的に副葬土器の少ないものは、鼎、壺、豆、罐といった日常土器から成り立っている。さらに注目すべきは、この日常土器に加わる形で酒器の杯が加わる。この杯はアンダーヒル氏も注目する觚形杯である場合がほとんどである(Underhill 2002)。そしてさらに規範性は薄い、これらに鬻といったものが伴う。いわば鬻という酒を注ぐものとそれが注がれる杯といった酒器が伴うのである。その意味では鬻と同じ機能を有する盃は、副葬土器数の多い墓すなわち階層上位者の墓にのみ副葬されており、規範性が高い。また、一つの例外を除いて、尊も階層上位者にのみ副葬が偏っている。盃や尊はこれまでの副葬土器に付加された最も高い階層上位者の墓の標識ということになるであろう。このような読みとりをまとめるならば、日常土器が副葬される階層から、さらに階層上位者として鬻あるいは杯が伴う階層、そして最高位階層ではさらに盃や尊が伴うという副葬規範が存在していた可能性が想定される。

大汶口文化中期後半でも、表2に示すように、先に見たような階層表現の副葬土器の器種における規範性が一応認められるであろう。また、鬻は児童墓である三六号墓の一例を除けば、相対的に杯より階層上位のまとまりを示している。最高位階層としては、尊には例外があるものの、盃は組み合わせ上安定した相関関係がみられる。さらに最高位階層には獸形器という特殊な土器も副葬され、副葬土器に威信財的な要素が認められる。

一方、大汶口文化後期では、表3に示すように、器種構成としてさらに瓶が加わっている。全体的に規範性の読みとりはより複雑になっているが、これは相対的に副葬土器数の少ない墓が減少していることにある。後に問題にしなければならぬが、副葬品を持たない成人墓も存在することから、次の山東龍山文化期との連続性でいえば、こうした墓が大汶口文化後期に増加し、より階層間の格差が広がっている段階であるかもしれない。さて、副葬土器の器種構成に見られる階層規範でいえば、日常土器のみの階層、さらに杯や瓶あるいは鬻が伴う階層、さらに尊や盃といったものが加わる最高位層という階層規範は存在していると思われる。ただし、杯の位置付け

表2 大汶口墓地大汶口文化中期後半墓葬の副葬土器構成

墓番号	墓壇長	墓壇幅	墓壇面積	鼎	壺	豆	罐	杯	尊	鬲	盃	獸形器	その他	土器数	備考
42	1.9	0.58	1.10	1										1	
46	2.4	2.5	6.00		1									1	攪乱
69	2	1.02	2.04				1							1	成人
36	1.92	0.67	1.29				1			1				2	子供
44	2	0.5	1.00		1		1							2	
96	2.5	0.63	1.58				1	1						2	
21	2.1	0.49	1.03		1				1					3	
93	2.1	0.67	1.41		1	1	1	1						4	
118	1.93	0.65	1.25		1	1	1			1				4	
49	2.65	0.68	1.80		1		1	4	1					7	
97	2.5	0.58	1.45		1	2	2	1	1					7	
22	2.07	0.61	1.26		1	2	1		4					8	
121	2.1	0.83	1.74		1	2		2	2					8	
16	2.15	0.49	1.05		3		1	1	3					9	
35	2.21	1.31	2.90		2	4	1	3	2					12	
67	1.8	0.5	0.90		6	2	1	1	2					13	
98	2.7	1.64	4.43		1	4		4	7		3			20	
75	2.6	0.72	1.87		5	4	1	7	2	1				21	
9	2.6	1.3	3.38		9	1	2	11	1	1				28	

はこの段階には觚形杯の存在しない段階であり、高柄杯以外の一般的な杯であり、その位置付けが相対的に低下している可能性もある。そのため、杯と日常土器との組み合わせは相対的に増している。

さらに墓葬構造において階層上位者を示すものがある。大汶口文化中期から出現する木槨構造である。木槨とその内部に木棺を設けるものであり、殷周時代においても階層上位者の墓にのみ使用される。その意味で高層墓に利用される墓葬構造であると推測されるが、大汶口中期前半では表1に見られるように、必ずしも副葬土器

表 3 大汶口墓地大汶口文化後期墓葬の副葬土器構成

墓番号	墓壇長	墓壇幅	墓壇面積	鼎	壺	豆	罐	杯	瓶	尊	鬲	盂	その他	土器数	備考
77	2.03	0.52	1.06					1	1				1	3	
5	2.05	0.69	1.41		1	1	1	1						4	
105	2.05	0.85	1.74		2		2							4	
2	2.3	0.67	1.54		3		2							5	
15	2.44	0.46	1.12		1	2	1	1			1			6	
127	—	—	—		1	1	1	1	1				1	6	
100	2.56	0.79	2.02		1	2	1	2			1			7	
122	2.3	1.09	2.51		2	2	1	1	1					7	
124	2.4	0.87	2.09		1	2	4	1		1				9	
1	2.5	1.4	3.50		1	1	1	7						10	男女合葬墓
64	3.5	1.8	6.30		2			8						10	
123	1.86	0.47	0.87		1	2	1	3		2			1	10	
4	2.76	0.67	1.85		1	2	1	2	2	2		1		11	
104	3.15	1.41	4.44		2	3		4	1	1			1	12	棺槨
17	2.75	0.9	2.48		2	1	1	4	3		1		1	13	
24	2.34	1.1	2.57		4	2	1	6	2					16	
125	2.67	1.65	4.41		3	4	1	2	4	2		1	2	19	
72	2.22	0.43	0.95			4		8	4	4	1	1	1	20	
3	2.8	1.2	3.36		2	2		5	7		3			21	
60	4.65	2.98	13.86		1	17	2	2	8	2			6	38	棺槨
117	3.28	2.2	7.22		1	23		18	5	2			5	54	棺槨
25	3.44	2.12	7.29		1	6	3	19		2			26	57	棺槨
47	3.23	1.7	5.49		4	7	5	6	27	1	3	3	1	57	棺槨
126	4.5	3.2	14.40		2	17	12	1	3	26			10	61	棺槨
10	4.2	3.2	13.44		5	14	4	3	13	38	2	2	12	93	棺槨

に示される階層標識とは対応してはいない。これはこの段階がまだ様々な墓葬要素が階層標識として収斂していないことを示していると思われる。これに対して大汶口後期墓地（表3）では、基本的に副葬土器構成や副葬土器数あるいは墓壇規模の階層標識に、木槨構造は関連している。社会階層の表現型式が次第に一つの規範に総合的に収斂していくことを示している。

このように副葬土器の構成、さらには副葬土器数、さらに墓葬規模、そして木槨構造という厚葬的な墓葬構造がすべてに相関するような格差が、大汶口文化中期から後期にかけて次第に整備されてきているのである。このことは墓葬に埋葬されている被葬者の生前の階層格差が次第に拡大していることを示している。まさしく階層化構造が次第に発展し複雑になっていく過程を示しているのである。そこで、このように社会の階層差が明確になっていく段階に、さらにそれを規範的に示しているものとして副葬土器の器種構成が挙げられるのである。

既に各時期でまとめたとように、階層差に應じるように副葬土器の器種構成が異なっている。下層階層の墓と考えられる墓葬には、鼎、壺、豆、罐などの日常土器が副葬されるが、これより階層上位の墓と考えられるものに、精製土器である酒器が加わっていく。その精製土器の組み合わせにも幾つかのパターンがあり、鬻や杯、さらには盃や尊というように次第に器種構成が複雑になっていく。それに応じて階層上位者と見なされる副葬土器数、墓葬規模や厚葬墓が対応している。

このことは、三段階の社会的なランク、すなわちA〜Cという三段階の社会的なランクに應じて、副葬する土器の器種規範が存在すると想定できるであろう。その相関は一〇〇パーセント完全なものというわけではないが、一定の規範が存在しているというふうな解釈することはできると思われる。副葬土器の器種の組み合わせを、階層構造を示す階層ランクとして模式的に表現すると図5のようになる。下層階層であるCランクの墓葬には、鼎、壺、豆、罐といった日常容器のみが伴う。その上位のBランクには、まず杯さらには鬻といった酒器が日常用土

器に付加されるように伴う。酒器の杯と鬻では、大汶口中期前半には觚形杯が鬻より高い位置にあったが、中期後半以降觚形杯の消滅に伴い、鬻が相対的に優位な組み合わせになっていく。Bランク内でも組み合わせ上のランク差が存在する。さらに最上階層であるAランクには日常土器や鬻や杯の酒器以外に盃や尊といった酒器が伴う。しかも盃などの酒器が白陶からなる場合も多い。土器の器種のみならず、土器の質がさらにプレミアを持つ白陶のような高級品に変質しているのである。

以上のように、階層格差に応じて副葬される土器の器種が異なり、そこに厳格な葬送規範が存在することが注目されるのである。しかも階層上位者には日常土器以外に、酒器が伴い、杯のような飲酒器から鬻など酒を注ぐ器、さらには盃のようなやはり酒を注ぐ器や酒を貯蔵する尊といった器種が揃っていく格差が存在している。その格差の背後には、階層上位者の酒器の独占が読みとれ、酒器が威信財になっていくと考えることができる。しかも酒器はこの場合様々な祭祀を執り行う場合の儀礼具であるところから、儀礼を執行するのが階層上位者であることを理解する

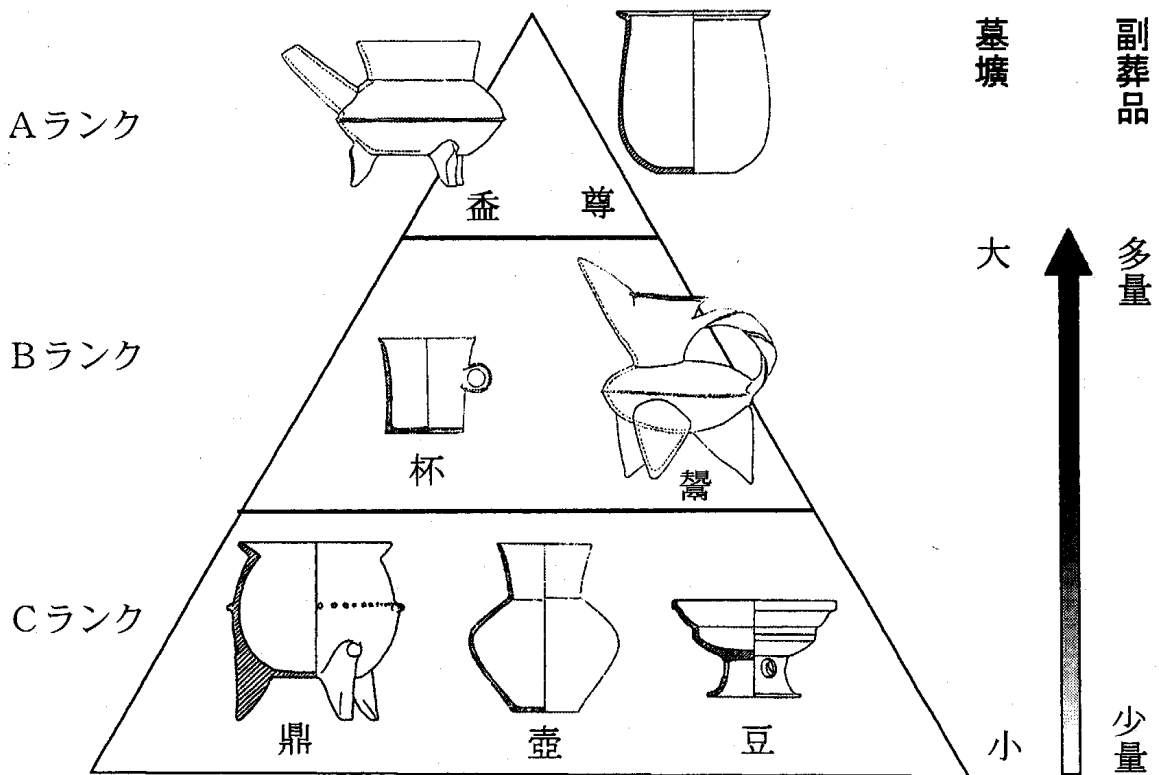


図5 大汶口文化の土器副葬階層規範モデル

ことができる。儀礼と階層秩序が密接に関連していることが、これらの現象から読みとれるのである。したがって、これらの現象は単に階層構造が社会的に明確化していく現象と捉えるだけではなく、儀礼行為が生前の社会的な階層秩序を示し、かつそれを維持するために使われていたということを理解することができるのである。そしてまたその儀礼行為には酒器が必要不可欠なものであったのである。まさしく後の周代に確立する礼制の原始的なあり方を示しているといえよう。

四 山東龍山文化期の事例分析

山東省諸城県呈子遺跡は、濰河の上流の山間部に位置している。先の分析対象の大汶口墓地が大汶河流域という魯中地区に位置していたのに対し、呈子遺跡はいわゆる魯東地区に位置する。その点では同じ山東内でも異なつた地域環境にある可能性がある。呈子遺跡では、層位的に第一期文化遺跡と第二期文化遺跡に分けられている。前者が大汶口文化文化期の墓葬であり、後者が山東龍山文化期の墓葬である。大汶口文化期墓葬は総数一二基と少ないため、分析の対象とはしない。ここで分析の対象とする龍山文化期の墓葬は九五基あり、また副葬品の土器型式からさらに三段階に分期できる。

呈子遺跡で注目すべきは、全体に副葬土器を持たない小型墓葬の比率が増していることにある。成人墓である山東龍山文化墓葬八七基中五三基が副葬土器を持たない墓であり、六〇%以上に昇る。大汶口墓地の場合、副葬土器を持たない墓が一三三基中一七基であるが、このうち六基が子供の墓であり、成人で無副葬墓は僅か一一基である。未成人墓を除く墓地全体の一一八基中僅か九%にしか過ぎないことから見ると、龍山文化段階ではより階層格差が明確になり副葬品を持つことができないう階層が増加していることを示している。大汶口文化期に比べ

龍山文化期では、こうした無副葬墓の比率が飛躍的に高くなる傾向は、他遺跡を含めて妥当であることを既に渡辺芳郎が実証的に述べている(渡辺一九九五)。

副葬土器を持たない被葬者階層の墓地が副葬土器を持つ墓に比べ、墓壙規模が小型であることは、もとよりこれらの被葬者の社会階層が低いランクにあることを示している。しかし、副葬土器を持たない小型墓葬を含めた分期は難しい。分期で示された墓葬分布とは、副葬品を持った比較的豊かな墓葬に限られるのである。図6に示すように、三段階に分けられた各段階での墓葬分布は比較的豊かな墓に限られている。呈子龍山墓地前期では、二、三基単位の墓で空間上六群に分かれているように見える。呈子龍山墓地中期と後期では大きく二群に分かれているように見なされる。このような現象は、比較的豊かな墓葬が墓群を形成していることを示している。また、渡辺芳郎らは、呈子龍山墓地では比較的豊かな墓群を含む西半部の墓葬に対し、墓地の東半部に位置する墓葬は相対的に優位でないことを示している(渡辺一九八七、Liu Li 1996)が、このことも優位でない墓群が偏在する可能性を示している。

呈子墓地の変遷(図6)をみていくと、墓地西半部に東西方向に列をなす墓葬配置と、墓地東半部に南北方向に列をなす墓葬配置の大きく二つの墓群集団が存在しているように見て取れる。その場合、前期では西群と東群がそれぞれ小群に分かれて散在しているが、中期以降次第に墓群が二つの系列にまとまっていくように見られる。同時に、西群の方が東群より相対的に規模が大きい傾向を示している。すなわち、大汶口墓地に見られたような墓群単位での階層格差がそのまま持続していることを示しているのである。ただし最下層の墓葬を墓群単位に含めて示すことは、時期決定ができないために不可能であり、共時的に最下位階層の墓群を示すことは現状ではできない。

さて、副葬土器を持つ墓葬の副葬土器とその構成を、各段階ごとに見ていきたい。既に大汶口墓地で実証した

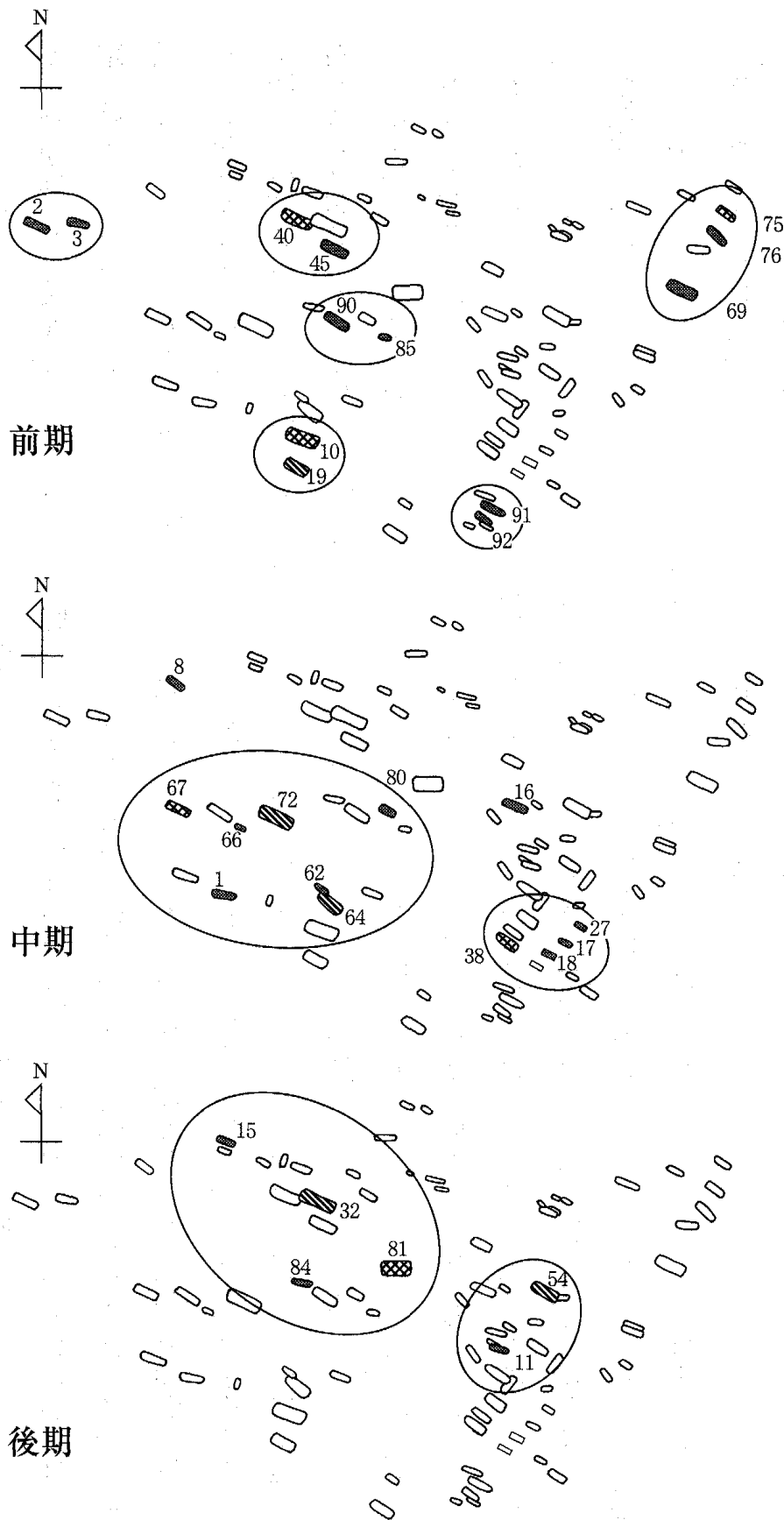


図6 呈子墓地墓葬分布変遷図 (斜線 Aランク、格子 Bランク、点線 Cランク)

ように、墓葬規模と副葬土器数はほぼ相関関係にある。呈子墓地でも各段階を墓葬の大きさ順に並べた場合、表4のように土器数と墓壙規模はほぼ相関しているといえよう。これは相対的に豊かな階層者内での階層差を示していると推測できる。さらに注目すべきは副葬土器数のみでなく、土器の器種構成に階層差が認められるのである。墓葬規模と土器数に応じて大きく三段階に副葬土器の器種構成を分けることができる。低い階層には、壺、罐、碗といった日常土器とともに、大汶口墓地では上位階層の副葬品であった酒器の杯が組み合わさった土器構成からなる。この杯が下位集団の副葬品構成に加わる傾向は、大汶口墓地後期墓群の杯の副葬品規範の揺らぎにもその傾向が認められたものである。さらに上位階層には、これら日常土器や杯に加えて、卵殻黒陶である精製土器の高柄杯あるいは盆や盤が加わっている。最上層階層には鬻や罍といった酒器とともに、大汶口墓地では低階層者の副葬品であった炊器の鼎や甗あるいは供膳具の豆といった器種が加わることになる。

したがって、呈子墓地の階層構造は図7に示すような階層構造の模式が成立するであろう。最下層階層は副葬土器など副葬品を持たない階層のDランク、壺・罐・碗といった日常土器と酒器の杯からなるCランク、さらにこれらの器種に高柄杯あるいは盆や盤が伴うBランク、さらに最上位階層には鬻や罍といった酒器とともに鼎・甗といった炊器などがともなうAランクといった階層区分ができるであろう。さらに階層秩序に應じるように、墓壙規模や副葬土器数が多いだけではなく、木槨墓といった墓葬構造においても厚葬が認められる。木槨構造は呈子墓地前期ではAランクとBランクに認められるが、呈子墓地中期・後期ではAランクにほぼ限られている。階層の秩序化が次第に明確になっていくことが理解できるであろう。

また、この状況を空間配置において示したのが図6である。Dランクを除く階層ランクを反映するように、墓群内での格差が認められるとともに、墓群間での相対的階層格差が明瞭である。なお、後期の東群の五四号墓はAランクとしたが、西群のAランクである三二号墓より墓壙規模や墓葬構造は遙かに劣るものであり、墓群間で

表 4 呈子墓地の副葬土器構成

墓番号	墓壇長	墓壇幅	墓壇面積	時期	鼎	壺	豆	罐	甌	杯	高柄杯	盞	碗	盆	皿	その他	土器総数	備考	性別
85	1.1	0.26	0.29	前期						2			1				3		女
51	1.12	0.41	0.46	前期		1		1					1				3		子供
36	1.3	0.38	0.49	前期		1											1		男
86	1.68	0.48	0.81	前期		1		1									2		女
3	1.7	0.61	1.04	前期			2										1		男
75	1.74	0.61	1.06	前期				1			1		1			1	5		女
2	2.15	0.62	1.33	前期				1									2		男
76	1.8	0.94	1.69	前期		2		1					1				4		男
19	2.25	0.85	1.91	前期		1		1			1		2				8		男
91	2.25	0.85	1.91	前期				1									1		男
45	2.39	0.85	2.03	前期		1		1					1			1	6		男
90	2.45	0.9	2.21	前期		1		1					2				8		男
10	2.7	0.9	2.43	前期							1		1				3		男
69	2.39	1.03	2.46	前期		1		1					1				5		男
40	2.7	1.25	3.38	前期		1		1			1		1			1	7		男
8	—	—	—	中期		1											1		女
17	1	0.31	0.31	中期													0		子供
62	1.1	0.35	0.39	中期			2										2		男
66	1	0.4	0.40	中期				1					1				1		男
27	1.05	0.5	0.53	中期				1					1				2		男
80	1.25	0.45	0.56	中期				1									1		男
18	1.88	0.48	0.90	中期													0		男
1	1.9	0.51	0.97	中期				1					1				2		男
16	2.08	0.48	1.00	中期													0		男
38	2	0.6	1.20	中期				1						1			4		男
67	2.1	0.7	1.47	中期						1							1		男
64	2.25	0.8	1.80	中期				2					1	1			8		男
72	2.62	1.1	2.88	中期				1					1			1	7		男
84	1.1	0.27	0.30	後期				1					1				3		女
15	1.4	0.65	0.91	後期				1					2				6		子供
11	1.95	0.5	0.98	後期					1				1				1		男
54	2.2	0.85	1.87	後期					2				2			1	9		男
81	2.4	1.14	2.74	後期							1		1			2	3		男
32	2.9	1.28	3.71	後期				2					2			3	16		男

の階層差は存続している。

さらに副葬器種構成が階層秩序と呼応した明確な規範が存在することを注目すべきである。副葬土器は葬送行為における儀礼行為と対応している可能性があり、儀礼行為における規範が階層構造と対応していることは注目すべきである。すなわち後の周代で明確化する社会秩序である礼制の原型とみなすこともできるのである。

さらに付言するならば、既に大汶口文化期後半に見られる集団単位での階層格差の拡大が認められたが、これらの集団単位は血縁関係にもとづく氏族単位であると予想された。しかも氏族内では次第に男性の相対的な優位性が認められ、次第に父系血縁関係が社会単の基本原則になることを示したことがある(宮本二〇〇五)。ほぼその考え方に沿うように、呈子墓地でも各段階の有力集団と考えられる副葬墓では、AランクやBランク階層墓は表6に認められるよう

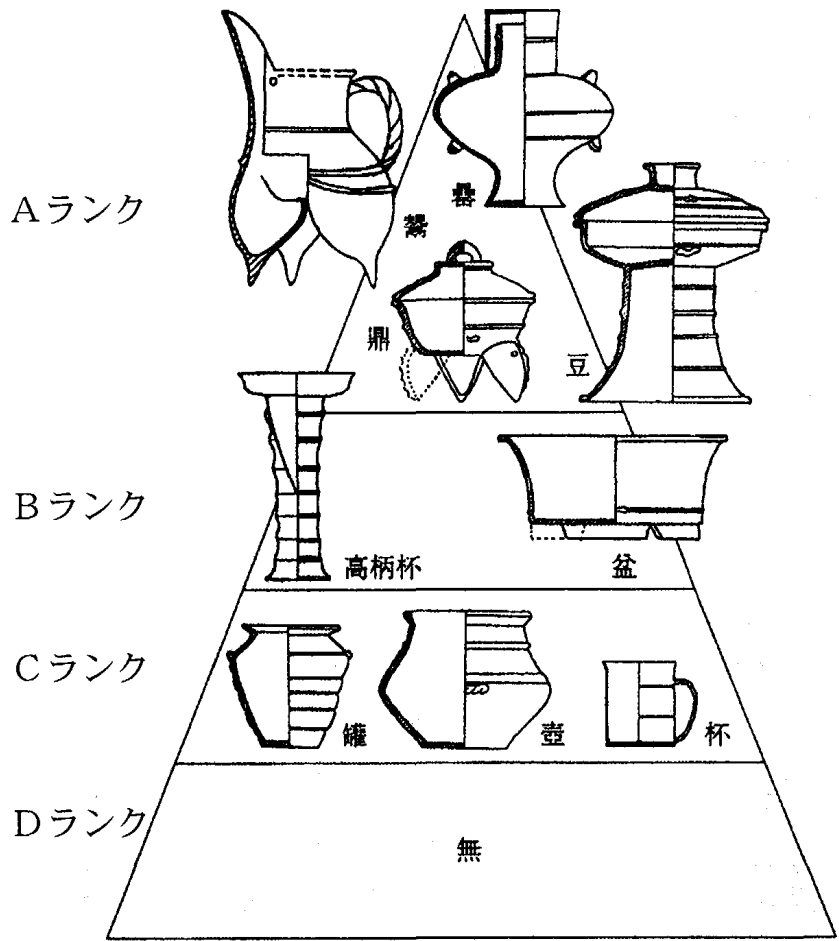


図7 山東龍山文化の土器副葬階層規範モデル

に、ほぼ男性に限られている。また、図6に示したように、各墓群の中心的存在である大型墓はA・Bランクであり、同時に木槨墓であるとともに、男性に限られている。山東龍山文化段階は、明確な父系血縁社会が母胎となった社会であると考えることができる。

五 階層化と副葬品構成の変化

以上のように、大汶口墓地と呈子墓地の墓葬分析を基に提示した社会階層モデルが、そのほかの墓地分析においても検証できるかどうか、次の課題となる。山東地域においてここで対象とする大汶口文化中期から山東龍山文化期の墓地発掘事例は、他地域の先史社会を考えるのに比べ豊富である。その中で、副葬土器の器種構成が各墓葬に渡って分かる事例を基に検証を試みたい。ここでは魯中地区として大汶口遺跡と対比する上で、曲阜西夏侯遺跡（中国科学院考古研究所山東隊一九六四・中国社会科学院考古所山東工作隊一九八六）、泗水県尹家城遺跡（山東大学歴史系考古專業教研室一九九〇）、鄒県野店遺跡（山東省博物館ほか一九八五）が挙げられる。また、魯東東部の呈子遺跡と同じ濰河流域に位置する遺跡として、膠県三里河遺跡（中国社会科学院考古研究所一九八八）が挙げられる。まずこれらの墓地分析から検証を試みる。この他、大汶口文化後期では魯東西部の大朱家村遺跡（山東省考古研究所・莒県博物館一九九一）、魯西の尉遲寺遺跡（中国社会科学院考古研究所二〇〇一）、山東龍山文化では魯東西部の大範莊遺跡（臨沂文物組一九七五）が挙げられるが、これらの墓葬内容も検討に加えることとしたい。

さて分析の方針としては、大汶口文化期と龍山文化期で提示された階層モデルが他の遺跡においてあてはまるかにある。まずは個々の墓葬における副葬土器の組み合わせと、階層標識である墓葬規模や副葬土器数にこれら

が相関しているかを示すことにある。その場合、その階層モデルをより現象的に示すために、副葬土器数という階層標識と副葬土器の構成すなわち階層モデルの相関を図化したい。個々の墓地群において任意の副葬土器数に対応して副葬土器構成が共變動的な一定の変化規則をもつかを示すことにある。これによって階層モデルを論証したいのである。

(a) 西夏侯遺跡

山東省曲阜西夏侯墓地は、樂豊実氏の編年によれば大汶口文化中期中葉から後期にかけての遺跡である。発掘報告による切り合い関係からすると、前段階と後段階に分かれるが、前者が大汶口中期を中心とする段階であり、後者が大汶口文化後期を中心とする段階である。ここでは中期と後期に呼び分けて、その墓葬内容を検討すれば、表5のように、副葬土器総数が大汶口墓地で見た場合Bランク以上の墓が多く、さらに後期になればその土器数の格差が拡大している。土器数一〇未満では日常土器のCランクの墓が認められるが、土器数一〇～二〇の墓ではBランクの墓として日常土器に杯や鬶などの酒器が伴う墓が優勢であり、さらに土器数二〇以上ではさらに盃や尊が伴ったAランクの墓が出現するとともに主体となっている。

ここでは中期・後期の墓を総合化し、さらに土器構成と階層表現である土器総数あるいは墓葬規模が対応しているかを示してみたい。土器構成では、Cランクは日常土器であり、Bランクにはこれらに酒器の杯やさらに鬶が加わる様相が見て取れた。大汶口墓地で明瞭になった格差を踏襲し、日常土器+杯をB1ランクとし、日常土器+鬶をB2ランクとする。後者には日常土器+杯+鬶を当然含むものである。さらにBランクの土器群に加え盃や尊が加わるのがAランクということになる。こうした土器構成のランクと階層表現である土器総数との相関関係は、図8に見えるようほぼ共變動している。基本的に大汶口墓地での階層モデルは、この遺跡でも当てはま

るといえよう。

(b) 野店遺跡

山東省鄒県野店遺跡は大汶口前期から後期まで連続的に続く墓地である。野店遺跡は報告書では一〜六期まで分期されている。本稿で対象とする時期は大汶口中期以降であり、その段階でこそ大汶口墓地との正当な比較が可能である。そこで、野店遺跡の場合、報告書でいう四・五期のみを対象として、分析を行いたい。また、分析には一定の資料数が必要なところから、四・五期をまとめて検討することにより、副葬土器の器種構成の規範が存在するか否かを考えてみたい。この場合、先の大汶口墓地で想定された階層構造のように、鼎を含む日常土器のみを副葬する墓をCランク、日常土器+杯をB1ランク、日常土器+鬻をB2ランク、さらにこれらに盃や尊が加えた副葬土器からなる墓をAランクとした場合、この階層関係が野店墓地に当てはまるかを検証してみたい。すなわち、階層関係を示す副葬土器数とこの階層モデルが相関するかを考えることにする。ただし、土器数かなり少ない場合は、単体で杯や鬻が出土する場合があるが、その場合はそれぞれB1、B2ランクとして表示する。ほぼ墓葬数が同数である

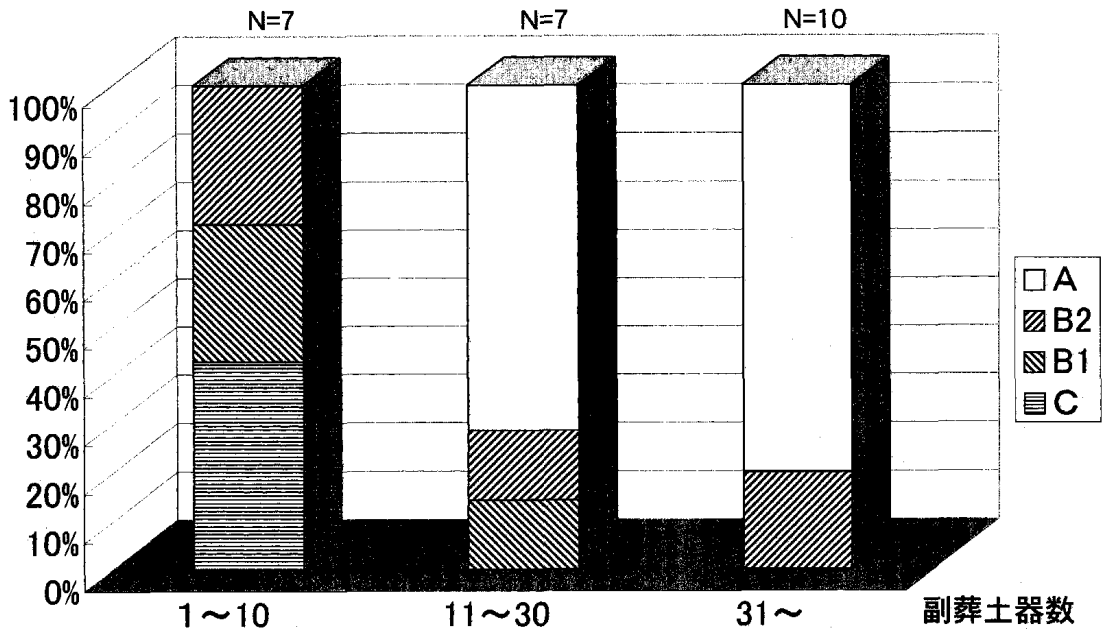


図8 西夏侯墓地の副葬土器数と階層規範モデルの相関

るように、任意の副葬土器数における土器構成を示したのが図9である。副葬土器数六〜一〇個と一一〜一五個では必ずしも正規変化を示してはいないが、階層関係を表示する副葬土器数が増加するにしたがい、土器構成のB1・B2ランク、Aランクの占める割合が増加している。これは土器総数と土器構成の階層ランクが共変動しているということができ、先の階層モデルが野店墓地の場合も当てはまることを示している。

(c) 尹家城遺跡

山東省泗水県尹家城遺跡は集落域内に住居址と墓葬が混在しており、明確な墓地群を形成していないところから、墓葬の空間分析は難しい。墓葬は切り合い関係や副葬土器型式から六期に区分されている。尹家城一〜三期が欒豊実氏の龍山前期、尹家城四〜六期が欒豊実氏の龍山後期に相当している。尹家城一期の墓葬は比較的大型墓が多いが、後の攪乱を受けている場合が多く、副葬品が本来のあり方を示しているかは保証の限りではない。墓壙規模と副葬土器数が必ずしも対応していない状況が認められるが、これは資料そのものの信頼性に問題があるため、ここでは資料評価の対象とはしない。比較的資料がまとまっている尹家城四〜六期

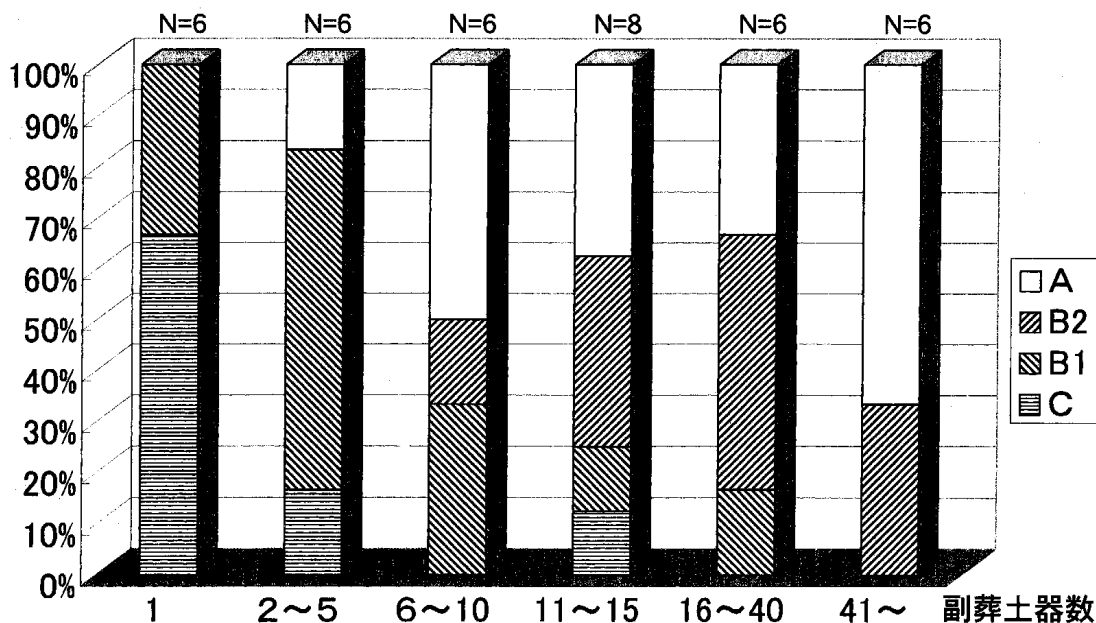


図9 野店墓地の副葬土器数と階層規範モデルの相関

表6 尹家城墓地の副葬土器構成

墓番号	墓壇長	墓壇幅	墓壇面積	時期	鼎	壺	豆	罐	甌	杯	高柄杯	匜	鬲	盆	簋	碗	盒	その他	土器数	棺槨
8	—	—	—	4															0	
109	—	0.8	—	4														1	1	1棺
114	—	—	—	4														0	0	0
204	—	0.68	—	4														0	0	0
211	—	0.95	—	4														0	0	0
213	—	1.1	—	4														0	0	0
215	—	0.3	—	4														0	0	0
142	0.8	0.4	0.32	4														0	0	0
10	2.64	0.6	1.58	4														0	5	0
7	2	0.94	1.80	4							2							1	1	1棺
9	2.15	0.94	2.02	4														0	0	0
115	2.5	0.9	2.25	4														0	0	0
143	2.52	1.2	3.02	4														1	1	1棺
216	2.2	1.4	3.08	4														0	0	0
203	2.7	1.2	3.24	4														0	1	0
127	3.05	1.08	3.29	4	1													3	3	1棺
12	3	1.5	4.50	4														5	5	0
205	2.4	1.9	4.56	4														0	10	0
212	3.04	1.5	4.56	4	1						1							3	3	1棺
116	2.78	1.76	4.89	4														0	4	0
139	3.52	1.5	5.28	4														1	2	1棺
128	3.2	1.7	5.44	4	1													2	2	1棺
79M2	2.86	2.1	6.01	4														1	6	1
133	3.3	1.84	6.07	4	1													1	1	1棺
79M4	3.6	2.3	8.28	4	1													1	3	1棺
126	4.1	2.5	10.25	4	3													8	8	1棺
134	3.85	2.8	10.78	4	2													6	4	1棺
138	4.16	3.1	12.90	4	1													7	2	1棺
15	5.8	4.36	25.29	4	1													3	1	1棺
214	—	1.02	—	5														1	2	2
104	0.8	0.45	0.36	5														0	0	0
107	1.5	0.4	0.60	5														0	0	0
220	1.97	0.42	0.83	5														1	1	1棺
119	1.77	0.5	0.89	5														0	2	0
130	2.3	0.5	1.15	5														1	1	1棺
105	2.01	0.84	1.69	5														1	1	1棺
79M5	2.4	1	2.40	5														1	1	1棺
210	2.24	1.1	2.46	5														1	1	0
118	2.46	1.1	2.71	5														1	1	1棺
120	—	56	—	6														0	4	0
125	1.88	0.34	0.64	6														1	4	1棺
137	2.1	0.36	0.76	6														2	1	1棺
123	2.26	0.58	1.31	6														7	7	1棺
135	2.3	1.04	2.39	6														1	1	1棺
121	2.6	0.96	2.50	6														1	1	1棺
124	2.6	0.96	2.50	6														1	1	1棺
112	2.7	0.98	2.65	6														1	3	1棺

の墓葬資料を、時期ごとにかつ階層表示である墓壇面積に応じて配列したのが表6である。この表からは、四期の七号墓や二〇三号墓のような例外はあるものの、先に呈子遺跡で提示した階層モデル(図7)は基本的に支持できるものである。ただし、単独の墓地群を形成していないことから、表6で示されたように時期による階層度合いが違ふことから、必ずしも社会階層の全体を表現するものではなく、階層の一部のみが表現されている可能性が想定される。

さて、無土器副葬墓であるDランクは、尹家城四期に認められるが、さらに時期決定できない墓葬も存在することから、Dランクの墓数の実態はこれ以上に多いものとなる。Eランクは、壺や罐などの日常土器と酒器の杯からなるグループであり、尹家城五期や六期の墓葬でその組み合わせが認められる。呈子遺跡では階層上位に組み込まれた豆が、この遺跡ではCランクの日常土器に組み込まれており、地域的に葬送規範の差異が存在する可能性も考えられる。Bランクは、さらに高柄杯や盆・簋や碗・盒あるいは鬲が伴うランクであり、尹家城四期や六期に認められる。Aランクでは確実に鬲が伴い、さらに鼎や甗といった煮沸具を伴うことが、尹家城四期で認められる。さらにこうした墓葬には棺槨構造という厚層墓の属性が付加されており、呈子遺跡の階層構造と同じである。このように尹家城遺跡の場合も、呈子遺跡の階層モデルに適合することが明らかである。ただし地域的差異として、尹家城遺跡ではCランクに豆が伴ったり、Aランクには匱が伴い鬲が存在しないような、呈子遺跡とは異なる器種構成が認められ、葬送規範にも幾分の地域差が存在することが確かめられた。

(d) 三里河遺跡

山東省膠県三里河遺跡は大汶口文化期と山東龍山文化期にかけての墓地であり、一遺跡において階層モデルの変化の把握が妥当であるかどうかを検証できる良好な遺跡である。三里河遺跡の大汶口文化期は、樂豊実氏の編

年によれば大汶口文化後期に限られている。同じ時期の大汶口墓地、西家侯墓地、大範莊墓地などに比べ副葬品数の格差は大きくなく、木槨墓も発達しないなど、アンダーヒル氏も指摘するよう (Underhill 2002) に、この地域は他地域に比べ社会の階層格差が低い地域であるかもしれない。そのような中でも、副葬土器の器種構成は副葬土器数と相関し、階層構造が見て取れる。また、六一基中一一基と全墓地の一八％に昇る副葬土器がない墓葬が認められ、無土器墓葬が増える傾向にある。副葬土器五個未満の墓葬では、鼎などの日常土器からなるCランクの組み合わせの墓であり、ここで見られるBランクの墓は一部これに酒器の杯のみが組み合わさるものである。三里河墓地では日常土器と杯という組み合わせを相対的に下位のCランクと考えれば、副葬土器5個未満はすべてCランクということができる。

ここでは他の墓地と同じ条件で、日常土器Cランク、日常土器+杯B1ランク、日常土器+鬲B2ランク、尊あるいは盃が伴うものをAランクとし、さらに土器総数一個以上五個以下、六個以上九個以下、一〇個以上の墓に区分した場合、図10のような土器総数と土器構成の階層モデルは共変動していることが確かめられた。

龍山文化期の墓葬は報告書では三期に分期されているが、樂豊実

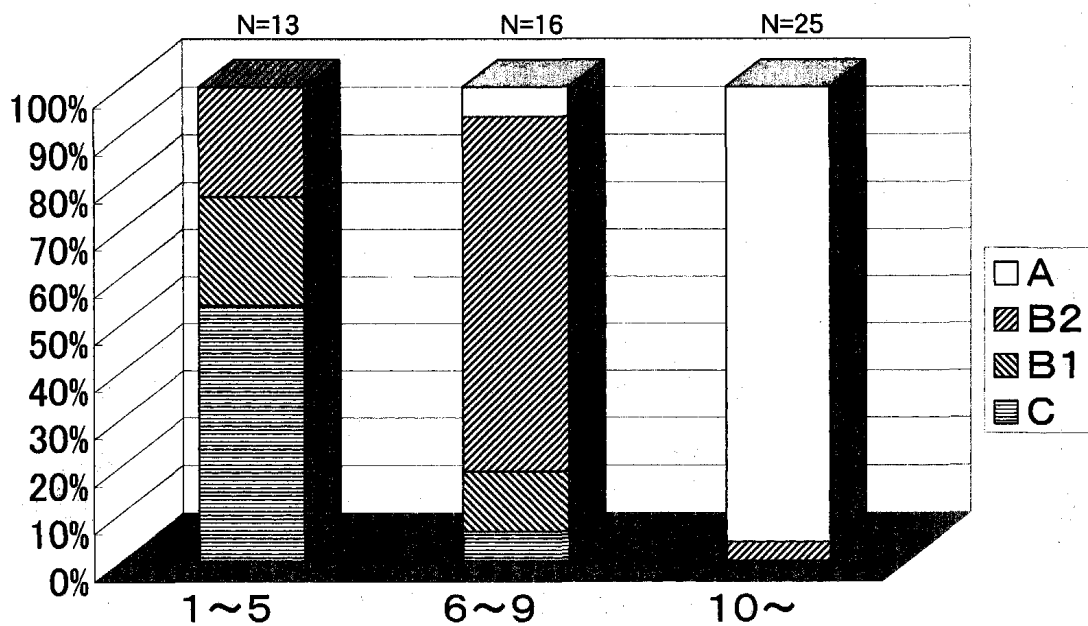


図10 三里河大汶口墓地の副葬土器数と階層規範モデルの相関

氏の編年によれば一〜四期に相当し龍山前半期を中心とする段階であり、呈子墓地にほぼ併行する時期である。大汶口文化期と同じように総じて副葬土器数の格差の開きは呈子墓地や尹家城墓地に比べ少なく、総じて副葬土器数は少ないといえよう。そこで、まず全時期に渡る階層表現と副葬土器器種との関係について眺めてみたい。副葬土器の個体数の割合を見ていくと度数部分分布の差異が認められる。基本的には副葬土器数と墓壙規模は相関関係にあり、副葬土器数は階層関係を表示するという他の墓地例と同じ現象が認められる。

さて、呈子墓地と同じように、無副葬墓をDランクとした場合、その全墓数九八基に対して三六基と三七%にも及び、Dランクとして最下位層を認めうるであろう。さらに呈子墓地の龍山文化階層規範モデルに従い、龍山文化では無土器墓であるDランク、罐や壺あるいは豆などの日常土器とともに飲酒器の杯が伴うCランク、これらにさらに高柄杯が加わるB1ランク、あるいは盆などが加わるB2ランクと階層化していく。さらに、これらに鬶といった酒器が伴うA1ランク、A1ランクにさらに甗などの煮沸具が伴うA2ランク、さらに鬶が伴うA3ランクと区分できる。他の分析と同じように、一・二個体の副葬土器の場合は、必ずしも組み合わせが揃っていないくとも特定の器種をしてランクの特徴を表す土器で代表させることにより、副葬土器数との相関を示すと図11のようになる。Cランク以上の器種構成の階層性と副葬土器数の多寡は相関関係にあることは図11から明白であろう。したがって三里河龍山文化期も、龍山文化の階層規範モデルは当てはまるといえるであろう。

一方、こうした葬送規範をより詳しく見ていくと、呈子墓地や尹家城墓地の規範とは異なり、鼎が日常土器として階層の低い墓葬にも認められるところが、この地域では大汶口文化的な規範の一部が他地域とは違って残存していることを示している。

以上のように、大汶口文化後期から龍山文化前半期に連続する三里河墓地でも、総じて大汶口墓地の三ランク階層規範モデルや龍山文化の四ランク階層規範モデルの存在を証明できたと思われる。ただし、大汶口文化から

龍山文化にみられるような副葬土器構成の規範変化は、龍山文化Cランク墓において揺らぎが認められる。特に大汶口文化期から龍山文化期の鼎に関する扱いの変化がそれほど大きいものでないことは、地域的な特殊性であり、またこの墓地が連続しているところにも理由があるかもしれない。一方、龍山文化期のBランクの特徴である高柄杯や盆・盤、さらにはAランクには鬻、甗、甗という順でレベル差が存在しており、龍山文化ではより階層規範が大汶口文化より細かくなっているといえよう。

(e) そのほかの遺跡の検討

大汶口文化中期以降の階層モデルが、大汶口文化の領域全体において地域的にどこまで普遍化できるかが、問題となるところである。これまで魯中や魯東における諸例でその検討を行ってきた。その意味で、魯東西部の流河流域に位置する大汶口文化後期の山東省莒県大朱家村墓地はどうであろうか。ここでは墓群が大きく三つに分かれており、墓葬規模や副葬土器数の格差も大きく階層関係が発達した状況を示している。副葬土器の構成と土器総数あるいは墓壇規模との共変動は、基本的には無

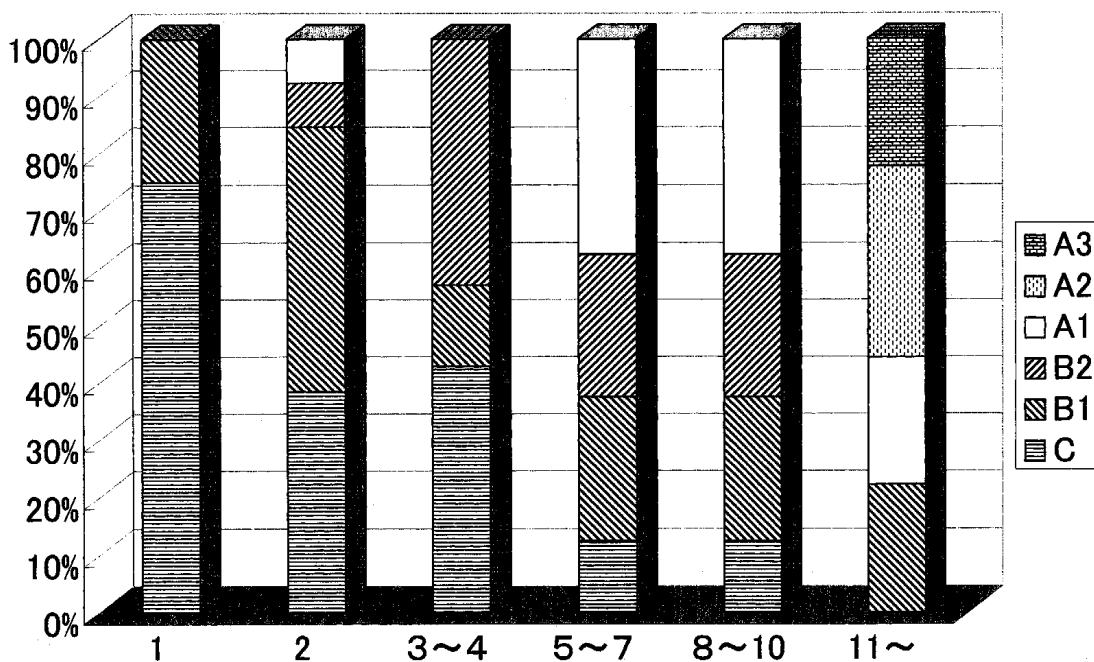


図 11 三里河龍山墓地の副葬土器数と階層規範モデルの相関

土器や日常土器からなるCランク、さらに杯や鬻という酒器が伴うBランク、さらにそれらに盃や大口尊が伴うAランクという階層規範で示される。こうした階層規範は魯東東部や魯中地区と同じ傾向を示し、葬送儀礼の習俗を共有しているといえるであろう。また、大朱家村墓地では階層上位者が男性に限られる傾向にあり、大汶口墓地に比べより父系家族社会が進展している。

このような魯中・魯東に見られた共通した階層規範と葬送儀礼が、魯西のような大汶口文化の周辺文化地域にもあてはまるかに興味を持たれる。大汶口文化後期には大汶口文化の影響が魯西の淮河流域を遡りさらに中原にまで至ると考えられている(杜金鵬一九九二)。安徽省蒙城县尉遲寺遺跡は、魯西南部の大汶口文化後期の集落遺跡であり、大汶口文化が淮河を遡って中原地域に影響を与える文化現象を考える際にも興味深い遺跡である。

尉遲寺遺跡の墓葬は住居群に伴い幾つかの墓群に分かれる可能性もあり、さらに時期細分も可能であるが、ここでは一括して検討を加え、遺跡全体の傾向を読みとりたい。尉遲寺遺跡の場合、墓壙面積や副葬土器数はともに他の遺跡に比べ格差が少なく、全体的に小型で副葬土器数も少ない墓が大半である。より共同体的な様相が強い社会状況を示している。そのため、ここではこれまで注目したような大汶口文化後期において、盃や尊などが加わるAランクが存在せず、Bランク以下の組み合わせから成り立っている。ただし土器の組み合わせのパターンは、魯中や魯東のものとは異なり、土器総数の少ないものでは杯や鉢・碗などからなり、これに鼎・壺・豆など日常容器が加わる組み合わせがその上位となり、さらに鬻が組み合うものが最上位という規範がおおよそ見いだせそうである。少なくとも、魯中以東の大汶口文化の規範意識とは多少異なるとともに、鬻という酒器がここでは威信財的な要素と相関している可能性がある。これは、葬送に際する儀礼行為が魯中以東とは異なっていることに起因するかもしれない。また、無土器墓葬が全体の二七%と他の同時期の墓地に比べ高い点も、地域的な階層表現の違いを示している可能性があるであろう。しかし酒器を中心とする階層規範が副葬土器に存在する点では、大

汶口文化の階層規範を受容しながら、地域的に変容させているとすることができるであろう。

一方、こうした階層規範と儀礼標識は大汶口文化周辺地域では複雑な状況を示している。この例が大汶口文化中・後期に併行する江蘇省新沂市花廳遺跡(南京博物院二〇〇三)である。花廳墓地は分布から大きく南区と北区に分かれるが、相対的には南区が古く北区が新しい傾向にある。その墓葬内容は文化要素からは大きく三類に分類されている。大汶口文化的な要素をもつ甲組、大汶口文化的様相が在地化して変容した乙組、良渚文化の影響を受けた丙組である(欒豊実一九九七)。年代的に古い南区では大汶口文化的要素をもつ甲組が多いが、ここでこの階層規範は大汶口文化に見られる工具系階層性と土器系階層性が認められ、さらに土器系階層性では大汶口文化で見られたような土器器種の階層ランクが存在している。すなわちそこには大汶口文化的な階層規範と葬送儀礼の規範が存在している。しかし、在地化した乙組や良渚文化の影響を受けた丙組の多い北区では、このような階層標識に加え、良渚文化的な玉器系階層性とでも呼ぶことができる玉器による階層標識(宮本一九九六)が伴い、複雑な状況に変化している。その意味では、接触地域における階層規範や儀礼規範の融合と変容が認められるのである。

さて、大汶口文化的な階層規範と龍山文化的な階層規範には、その内容がいくらか異なっていた。階層規範に応じた土器構成が異なるのと同時に、龍山文化になれば社会の複雑化に伴いより階層規範は分化している。その場合、土器構成で見れば、従来Bランクにあった杯がCランクに格下げとなるとともに、鬻がAランクに格上げになり、日常容器であった鼎もAランクへ格上げの傾向にあった。こうした器種と階層規範の変化は、葬送儀礼の儀礼行為の変化に伴うものであろう。

しかし、こうした変化は、必ずしも魯中・魯東ともに斉一的に起こるものではない。三里河墓地における大汶口文化から龍山文化の変化がそうであったように、山東省臨沂県大範莊墓地(臨沂文物組一九七五)などがその

例に挙げられる。大範莊墓地は龍山文化初期と考えられ、魯東西部の沂河流域に位置している。この墓地における副葬土器の組み合わせによる階層性は、壺・盆などの日常容器に、高柄杯が組み合い、さらに鬻が組み合い、そして鼎や杯が組み合わさるといったものである。したがって、龍山文化初期の段階には、例えば鼎などが格上げになるような大汶口文化から龍山文化への葬送規範的・階層構造的な変化が認められるが、それと同時に魯中・魯東は齊一的に葬送儀礼が変化しているのではなく、その変化は杯が最上位階層と組み合わさるような地域的な差違が見いだされることも注意すべきであろう。

六 山東先史時代の身分標識とその歴史的位階付け

これまでの検討により、従来考えられていたような墓葬規模、副葬土器数、墓葬構造といった優位的な階層表現が相関する階層関係が、大汶口文化から山東龍山文化の山東先史社会に認められるだけでなく、大汶口文化中期以降、副葬土器の器種構成が階層表現として利用されていたことを明らかにしてきた。大汶口文化から山東龍山文化に向けて次第に階層間格差が開き、三段階のランク差から四段階のランク差へと階層格差が進行していったことが明らかとなったであろう。さらにこうした階層間格差は、集団間での階層差として表現されていることが墓地の空間分析から示されたが、その集団単位は血縁関係にもとづく氏族単位であると想定された。さらに、このような血縁集団は山東龍山文化に至るに従い、すべての墓地集団に当てはまるわけではないが、次第に父系血縁集団として固定化していったことがある程度実証できたとと思われる。

さらに注目すべきは、大汶口文化期と山東龍山文化期では明らかに葬送規範が変化していることである。三段階のランク差とした大汶口文化の社会秩序では、鼎、壺、罐、豆などの日常土器が副葬されるCランク、それら

の土器に加えて酒器の杯や鬻が伴うBランク、さらには酒器の盃や尊が付加されるAランクという階層秩序が認められた。とりわけ階層上位者が酒器を独占していく階層構造は、酒器を使って行われた祭儀や儀礼行為を階層上位者が管理していたことと関係しているのであり、そうした表現から階層関係を表現するのは、まさしく儀礼行為と身分秩序が対応する後の礼制の原始的なあり方を示している。

一方、山東龍山文化の段階になると大汶口文化期の副葬規範とは異なった新たな規範が形成され始める。この時期は四段階の階層差に区分できるが、無副葬土器墓あるいは無副葬品墓のDランクが最下層ランクと見なされる。続いて、罐や壺などの日常土器とともに酒器の杯が副葬されるCランク、さらに精製の酒器である高柄杯や盆・簋が伴うBランクである。最上位階層墓は鬻や罍などの酒器とともに、鼎や甗などの炊器を伴うものであり、大汶口文化の副葬土器規範とは大きく異なっている。従来のように酒器を中心とした祭儀や儀礼に加え、それらの行為に炊器を伴った祭儀が加わった可能性もあろう。

こうした社会進化の状況は、山西省襄汾県陶寺墓地などで同じように示されており、中原の新石器時代後期初頭の廟底溝二期文化では、山東の大汶口文化から山東龍山文化期と同じように、父系血縁集団単位での階層差が広がっていったことが明らかとなっている(宮本一九九b)。ところが陶寺墓地では、墓壙規模や副葬品数、墓葬構造などと相関するように階層秩序が認められるものの、副葬土器に限ってみれば、山東地域のような副葬土器の器種が階層構造に対応する事実は認められない。あるいは副葬土器の器種構成は両地域で大きく異なっているといえよう。図12に示すように、陶寺墓地の最高位の墓である大型甲種墓の三〇一五号墓の副葬土器は、罐、罍、竈のような貯蔵具や煮沸具に限られており、山東地域で認められた杯、鬻、盃、尊・罍などの酒器が認められないことにある。アンダーヒル氏も同時期の黄河下流域の山東と黄河中流域を比べた場合、黄河中流域ではむしろ玉器やトルコ石製品を重視しており、土器よりは重要な被葬者への贈与品と考えている (Underhill 2002)。

ところが初期国家形成期である黄河中流域の二里頭文化では、鬻や杯などの酒器が副葬品としては階層表現を担うことになる(宮本二〇〇五)。二里頭文化の墓葬に見られる副葬土器では、日常土器に爵という酒器の杯に相当する器種が、さらには鬻や罍といった酒を注ぐ酒器が伴うという形で被葬者の階層が高くなる傾向にある(宮本二〇〇五)。さらには酒器の土器を模した青銅製の爵や罍を持つ階層が、最も階層上位者である。その意味でも酒器が階層表現において重視されていたことが理解される。ここで注目すべきは、二里頭文化に認められるような階層標識と副葬土器器種の関係がとりわけ山東の大汶口文化のものに近いという事実である。より二里頭文化に文化系統として近い陶寺墓地では、このような副

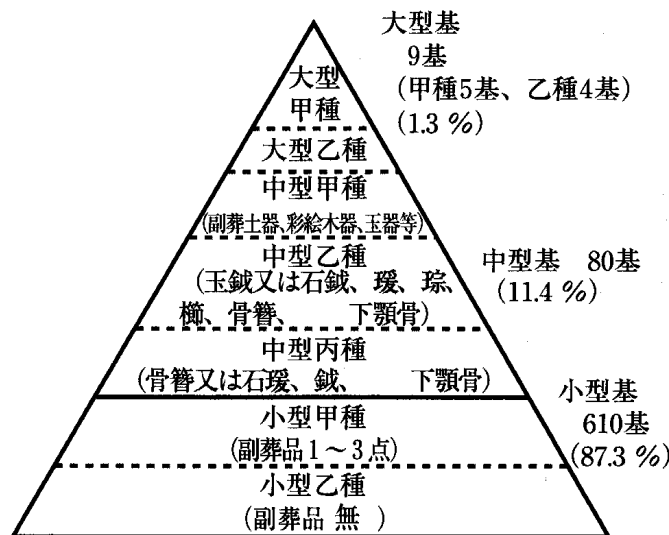
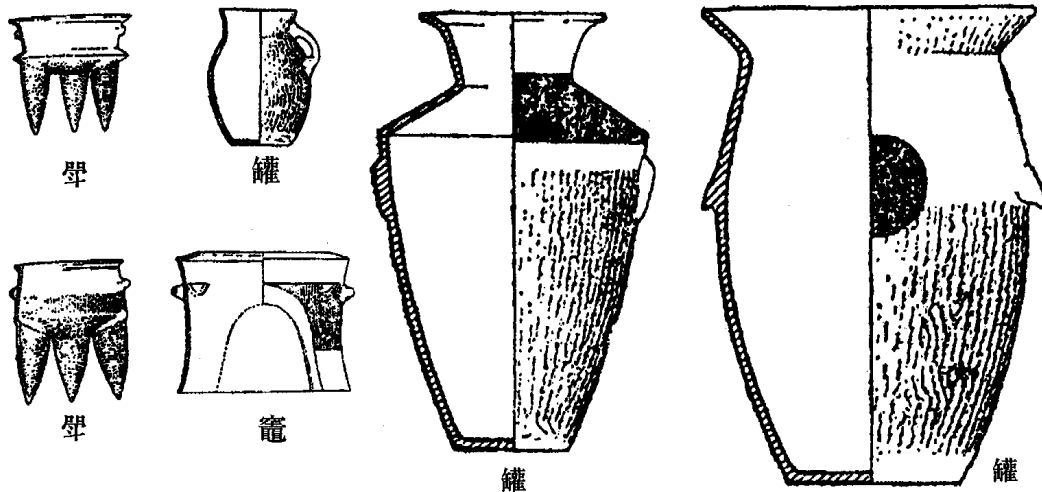


図12 陶寺遺跡における墓葬階層構造と副葬土器

葬土器の規範や階層構造と副葬土器器種が相関する事実は認められなかった。葬送行為における大汶口文化的な規範を二里頭文化が取り入れている可能性があるということになる。その意味で興味深いのは、大汶口後期には、大汶口文化の影響が淮河上流域を伝わって中原地域まで達している事実である。また、先に検討した淮河流域の尉遲寺遺跡では、酒器の鬻を階層上位表現とする葬送規範が見いだされた。この後の王湾三期文化での墓葬内容の実態が不明であるが、大汶口文化の葬送規範を王湾三期文化を介して二里頭文化につながったと仮定するならば、二里頭文化の葬送規範が大汶口文化の葬送規範に淵源するものであると推測することも、あながち見当違いのことではなくなるのである。いわば二里頭文化の階層標識や階層秩序は、大汶口文化に見られるような社会秩序を基として発展した可能性があるのである。

ところで、商代すなわち二里岡文化以降の青銅彝器は、二里頭文化の段階とは異なり爵や斝などの酒器以外に、鼎や甗などの煮沸具、簋や盤などの供膳具が伴う。二里岡文化期におけるこれら青銅彝器の器種構成と階層構造との関係を本稿で明らかにする余裕はないが、それらの青銅彝器の器種構成は山東龍山文化期の階層秩序を示す副葬土器の器種構成とほぼ同じ内容である。商社会が二里頭文化以降の新たな社会秩序の中に、東方の山東に存在した葬送規範あるいは葬送儀礼に見られる社会秩序を導入した可能性があるのではなからうか。それはまさに東方的な儀礼規範を社会秩序に当てはめる礼制的な規範であり、それを商社会の新たな地域統合にあたって必要とした新しいイデオロギーではなかったかと想定するのである。地域統合における他地域のイデオロギーを吸収していく過程こそが、初期国家に見られる王権の新たな振張を示すものであると考えるのである(宮本二〇〇五・二〇〇六)。

七 おわりに

本稿では、山東先史時代の墓葬分析から階層社会の到来を説明してきた。そこで認められる身分標識は、酒器などを用いる儀礼行為と関係するものであり、殷周社会における礼制の直接の母胎になる概念や社会規範であることを述べようとした。しかし、山東先史社会から二里头文化や二里岡文化に至る細かな過程を、未だ実証的には示してはいない。さらには、大汶口文化や山東龍山文化に見られた社会秩序に応じた葬送儀礼の実体が明らかでないままである。葬送行為において具体的にどのような儀礼行為がなされていたのであろうか。そういった問題を解決するための副葬品配置の問題なども、今回は触れていない。実際、大汶口文化期の墓葬において、鼎などの容器にはブタなどの動物骨が残されており、単なる明器として土器が副葬されたのではなく、そこでは何らかの饗宴を示す葬送行為が行われていたのである。アンダーヒル氏によれば、大汶口文化に見られる多量の規格化された副葬土器は、会葬者たちが被葬者の死を悼んで持ち寄り、その数は葬儀に参加した人数を示すとともに被葬者の地位を表すものであると想定している (Underhill 2002)。また劉莉氏は呈子墓地において、墓葬の脇に発見される土坑には土器や石器あるいは豚の下顎骨などともに灰が詰まっていることから、葬送儀礼として祖先祭祀がここで行われたと想定している (Liu 1996, Liu 2004)。こうした葬送儀礼の具体的な行為に関しては、今後の課題として残しておくことにしたい。

参考文献

岡村秀典二〇〇五『中国古代王権と祭祀』学生社

山東省考古研究所、莒県博物館一九九一「莒県大朱家村大汶口文化墓葬」『考古学報』一九九一年第二期

山東省博物館、山東省文物考古研究所一九八五「鄒県野店」文物出版社

山東省文物管理处、済南市博物館一九七四「大汶口」文物出版社

山東大学歴史系考古專業教研室一九九〇「泗水尹家城」文物出版社

昌濰地区文物管理組、諸城県博物館「山東諸城呈子遺址発掘報告」『考古学報』一九八〇年第三期

中国科学院考古研究所山東隊一九六四「山東曲阜西夏侯遺址第一次発掘報告」『考古学報』一九六四年第二期

中国社会科学院考古研究所一九八八「膠県三里河」文物出版社

中国社会科学院考古研究所二〇〇一「蒙城尉遲寺—皖北新石器時代聚落遺存的発掘与研究」科学出版社

中国社会科学院考古所山東工作隊一九八六「西夏侯遺址第二次発掘報告」『考古学報』一九八六年第三期

杜金鵬一九九二「試論大汶口文化穎水類型」『考古』一九九二年第二期

麦戈文、方輝、樂豊実、於海広、文徳安、王辰珊、蔡鳳書、格里辛・霍爾、加里・費曼、趙志軍二〇〇五「山東日照市兩城鎮遺址龍山

文化酒遺存的化学分析—兼談酒在史前時期的文化意義」『考古』二〇〇五年第三期

南京博物院二〇〇三「花廳—新石器時代墓地発掘報告」文物出版社

宮本一夫一九九五「華北新石器時代の墓制上にみられる集団構造(一)」『史淵』第一三二輯

宮本一夫一九九六「長江下流域新石器時代の地域集団」『日中文化研究』第一〇号

宮本一夫一九九九a「琉璃河墓地からみた燕の政体と遼西」『考古学研究』第四六卷第一号

宮本一夫一九九九b「中原と辺境の形成—黄河流域と東アジアの農耕文化—」『現代の考古学3 食糧生産社会の考古学』朝倉書店

宮本一夫二〇〇〇「中国古代北疆史の考古学的研究」中国書店

宮本一夫二〇〇五「中国の歴史〇一 神話から歴史へ」講談社

宮本一夫二〇〇六「中国における初期国家形成過程を定義づける」『東アジア古代国家論—プロセス・モデル・アイデンティティ—』

すいれん舎

樂豊実一九九七「海岱地区考古研究」山東大学出版社

林滢一九九〇「周代用鼎制度商榷」『史学集刊』一九九〇年第三期

- 臨沂文物組一九七五「山東臨沂大範莊新石器時代墓葬的發掘」『考古』一九七五年第一期
愈偉趙一九八五「周代用鼎制度研究」『先秦兩漢考古學論集』文物出版社
- 渡辺芳郎一九八七「山東龍山文化墓制考—呈子遺跡の検討—」『東アジアの考古と歴史 上 岡崎敬先生退官記念論集』
- 渡辺芳郎一九八九「劉林遺跡墓制考」『史淵』第一二六輯
- 渡辺芳郎一九九二「大汶口遺跡墓制考—階層の変異を中心として—」『史淵』第一二九輯
- 渡辺芳郎一九九四「墓地における頭位方向と階層性—大汶口文化を中心に—」『考古学研究』第四〇巻第四号
- 渡辺芳郎一九九五「墓地における階層性の形成—大汶口・山東龍山文化を中心として—」『考古学雑誌』第八〇巻第二号
- Underhill. P. Anne 2002 *Craft Production and Social Change in Northern China*. Kluwer Academic/Plenum Publishers, New York.
- Liu. Li 1996 Mortuary ritual and social hierarchy in the Longshan culture. In *Early China* 21 : 1-46.
- Liu. Li 2004 *The Chinese Neolithic Trajectories to Early States*. Cambridge University Press, Cambridge, UK.